

第5章 総 括

第1節 弥生時代～古墳時代の動向

今回の調査では、弥生時代後期から近世まで約2,000年間にわたる浅川扇状地の中のとくに桐原－吉田地区の集落変遷の様子が分かってきたが、この項では、弥生時代から古墳時代の集落の変遷について、周辺遺跡の状況を踏まえて概観し、調査成果の理解の一助としたい。

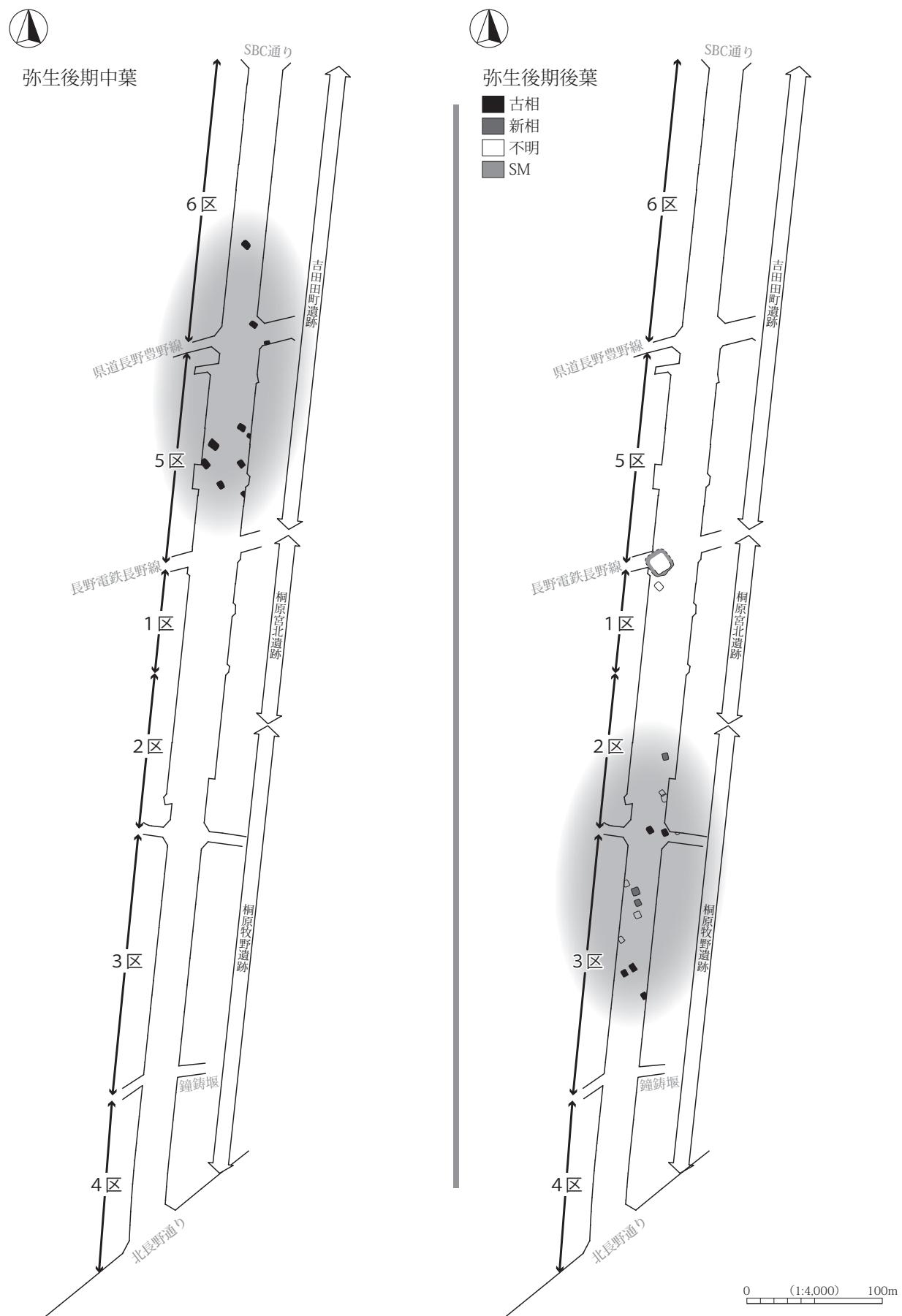
1. 弥生時代〔第374図〕

調査地内からは弥生時代後期中葉と後葉の2時期の集落跡と後期終末の墓跡が確認されている。なお、遺構は確認されなかったものの、中期前葉から中葉の土器が5区（吉田田町遺跡）の自然流路内（NR 5001・5002）から出土しており、流路の上流となる調査地北西側に未知の集落が存在する可能性も考えられる。

確認された後期中葉の集落跡は、北側地区の5・6区（吉田田町遺跡）となり、竪穴建物跡が10軒確認されている。また、確認された竪穴建物跡の中には調査区境に掛かるものもあり、集落は調査区外まで広がると考えられる。本遺跡の北西約500mには「吉田式土器」の標式遺跡である吉田高校グランド遺跡があり、同じ集落である可能性も考えられる。本集落跡の詳細な時期は、出土遺物から、おおむね本村南沖遺跡（県埋蔵文化財センター2017）で細分された吉田式期の新相（6段階）に相当すると考えられる。

後期後葉の集落跡は南側地区の2・3区（桐原牧野遺跡）を中心に広がり、竪穴建物跡が15軒確認されている。また、確認された竪穴建物跡の中には調査区境に掛かるものもあり、集落は調査区外まで広がると考えられ、本遺跡の西側に位置する、市教委が調査を行った桐原宮北遺跡（長野市教委2012）で確認された当該期の住居跡なども、同じ集落であると考えられる。遺跡群内の当該期の主な遺跡としては、扇央部に檀田遺跡、扇央部より西側に本村東沖遺跡・長野女子高校校庭遺跡などがある。本遺跡は扇状地の中央部に位置し、前述の遺跡と並び当概期の中核的な遺跡となろう。確認された竪穴建物跡の中には、その後の古墳時代や古代の遺構と重複し、詳細な時期がはっきりしないものもあるが、本集落跡は、出土土器や建物跡の形状等から、古相と新相の2時期に分かれると考えられる。

後期終末の墓跡は、後期後葉の集落跡の北側にあたる1区（桐原宮北遺跡）で確認されている。後期後葉の新相とした集落と同時期かその直後に造営された墓跡と考えられる。墓跡は北西側が長野電鉄長野線に掛かり全体の形状は不明であるが、周溝を含めた一辺の長さが18m以上になる大規模な方形周溝墓と考えられ、この地区の首長墓である可能性が考えられる。主体部は確認されていないが、周溝からは多量の土器が出土している。周溝から出土した土器は、多くが周溝底よりは高い位置から礫などと共に出土していて、墳丘上で葬送時に使用された土器が、周溝が埋没する過程で周溝内に転落あるいは廃棄されたと考えられる。また、出土した土器は、口縁が二重となる珍しい形態の壺といった土器も含まれるが、そのほとんどは在地の土器である。しかし、その中に北陸地域の形態を取り入れながらも、箱清水期の器面調整技法を踏襲した土器がみつかっている。このことは、他地域との交流を行いながらも在地の伝統を尊重する概期の当時の人々の様子が窺える。墓跡の所属する時期は、弥生時代から古墳時代へと時代が変わっていく時期にあたると考えられる、土器の形態にも変化が認められるが、周溝墓上で執り行われた葬送の儀



第374図 遺構変遷図 弥生時代 (1:4,000)

札は弥生時代の伝統を色濃く残していたと考えられる。

2. 古墳時代〔第375図〕

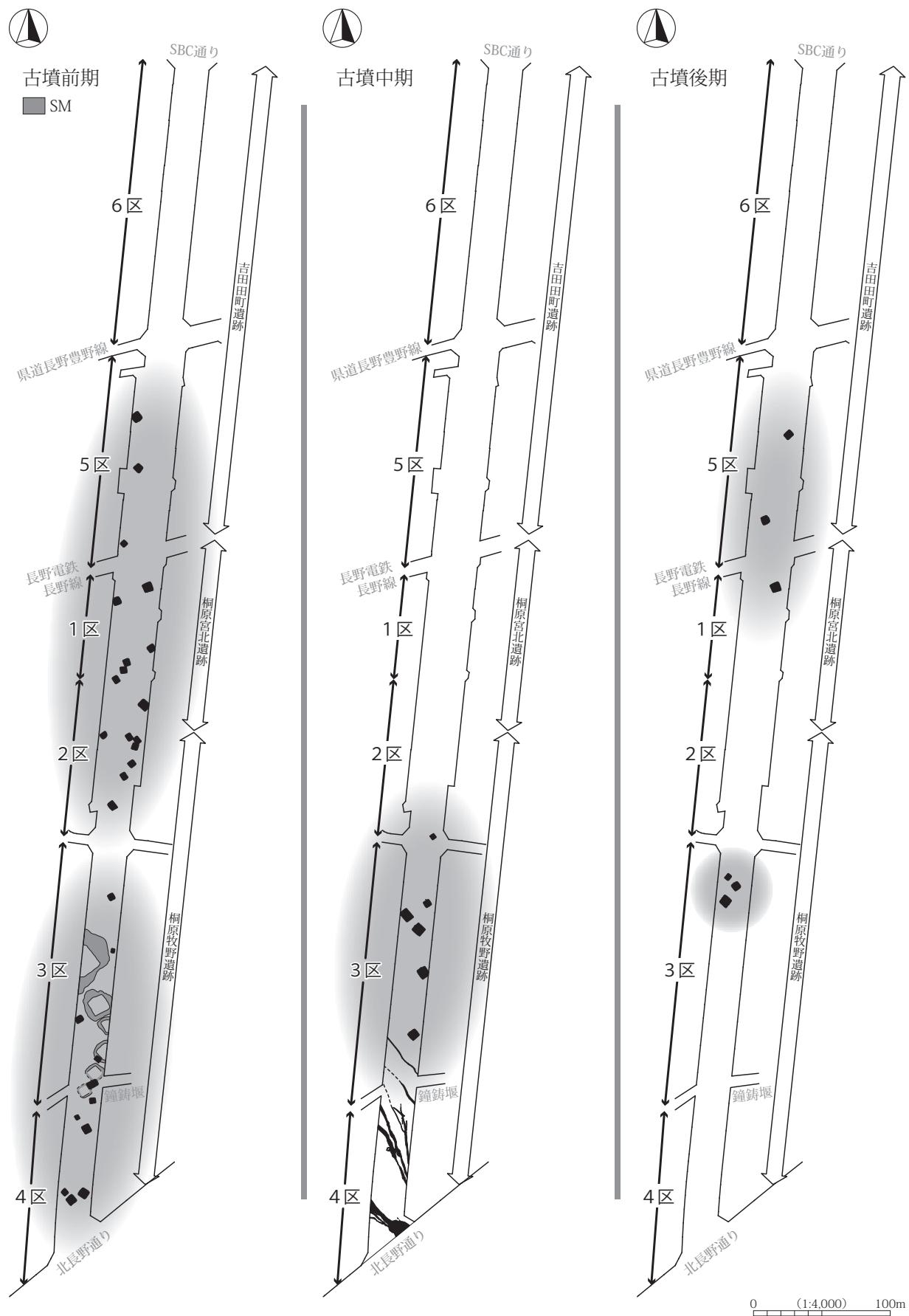
調査地からは古墳時代前期から後期の集落跡と前期の墓跡が確認されている。

確認された前期の集落跡は、北端の6区を除く1～5区（桐原宮北遺跡・桐原牧野遺跡・吉田田町遺跡）のすべての地区に広がり、竪穴建物跡が28軒確認されている。また、確認された竪穴建物跡の中には調査区境に掛かるものもあり、集落は調査区外まで広がると考えられ、本遺跡の西側に位置する、市教委が調査を行った桐原牧野遺跡（長野市教委2016a）で確認された当該期の竪穴建物跡なども、同じ集落であると考えられる。これまで、本遺跡群内から前期の大きな集落はみつかっておらず、本遺跡が中核的な集落になるとと考えられる。竪穴建物跡は、古代の集落跡と重複しており、詳細な時期がはっきりしない竪穴建物跡もあるが、その分布状況や墓跡との重複関係から、北側（1・2・5区）と南側（3・4区）2か所・2時期に分かれる。当初南側の地区にあった集落が北側に移動し、その南側に墓域が造成されたと考えられる。集落内からは、東海地域や北陸地域の影響を受けた土器が多量に出土しており、様々な地域との交流がうかがえる。

中期の集落跡としては2・3区（桐原牧野遺跡）から竪穴建物跡が6軒確認されている。前期の集落跡に比べると半分以下の規模となり、集落域の南側には北西から南東方向に流れる土砂を埋土に持つ自然流路が複数確認されていて、浅川やその支流が氾濫するような大規模な自然災害が起ったとも考えられる。また、竪穴建物跡が前期の墓域に重複しているので、中期の集落が営まれる頃には墓域としての機能は失われていたのだろう。本遺跡の北東約1.4kmには、当該期の中核的な集落となる本村東沖遺跡（長野市教委1993）がある。本村東沖遺跡では剣形品を中心に研磨段階のみが行われていたとされる石製模造品製作工房址が確認されており、本遺跡からも、石製模造品製作工房址と考えられる竪穴建物跡（SB3062）がみつかっているので、本遺跡と本村東沖遺跡は、密接な関係を持っていたと推測される。なお、本村東沖遺跡の調査成果からは、石製模造品の製作には、ある種分業が存在していたという見解が示されており（櫻井1993）、本遺跡の石製模造品製作工房址は、本村東沖遺跡の工房址では行われていない、白玉の製作や穿孔の工程を担っていたのかもしれない。

後期の集落跡は北側の1・5区（桐原宮北遺跡・吉田田町遺跡）から竪穴建物跡3軒、南側の3区（桐原牧野遺跡）から竪穴建物跡3軒が確認されている。調査区内では竪穴建物跡が6軒散見される程度となってしまうので、集落の中心が調査地外へ移動した可能性が考えられる。とくに、北側の桐原宮北遺跡では、西側（長野市教委2012）と東側（長野市教委2016b）をそれぞれ長野市教委が調査し当該期の竪穴建物跡が検出されているので、どちらかに当該期の集落の中心が動いたのかもしれない。

前期の墓跡としては、南側の3・4区（桐原牧野遺跡）から墳墓が6基確認されている。いずれの墳墓も主体部や墳丘は残存せず、周溝のみが確認されている。6基は南北に並んで確認されており、北側に位置する墳墓が最大となり、南にいくほど小規模となる。弥生時代の周溝墓のように周溝を共有することはなく近接しているが、それぞれは独立している。墓跡は6基とも平面形が方形となると考えられるが、最北の墳墓は他の墳墓と比較して規模がかなり大きいことから、前方後方形の可能性も考えられる。6基の墳墓のうち中央の墳墓（SM3004）の周溝以外は、土器の出土が少なく、築造時期の違いは、はっきりしない。SM3004の周溝底からは高壙や器台、小形の壺や鉢がまとめて出土していて、周溝内で葬送の儀礼が執り行われたと考えられる。また、儀礼に使用された土器には、西濃地域の影響を受けた高壙や、装飾器台が使われていて、被葬者の性格を考える上で重要な資料となった。



第375図 遺構変遷図 古墳時代 (1 : 4,000)